



小説「陳夫人」に現れ  
臺灣民俗

陳 紹 馨

I

文學作品として「陳夫人」は既に相當高く評價されてをり、文學座によつて上演されてゐる。文學の立場より見て専門家には恐らく又意見もある事と思ふが、筆者は此處で臺灣の社會、民俗の一記録として見て行きたい。事實此の作品への關心は主としてその題材的方面に集中されてをり、殊に南方政策の據地東亞共榮圈建設の試驗案としての臺灣の生活を描いたものとして時局柄關心をそゝつてゐる事は見のがせない。

臺灣の社會、民俗を扱ふに當つて作者庄司總一氏は高い處から見下してゐるものではなく、小ぎたない木島人社會にある程度迄ふみ込み、骨折つて研究し、温い心を以て理解しようと試み、且つ之を善くして行かうとする善意に充ちてゐる事は歴然紙面に現れてゐる。此貞禁な態度と建設的な精神は、今迄の臺灣を扱つたものにあまり感ぜられない處であり、木島人間においても「陳夫人」が相當好感を有たれてゐるのはそのためであらう。木島人の民族や心理の痛寫に當つて、細部に處々過誤があるのは既に二三の人の指摘した處であり、此處では改めて立入らないが、併しそれはこの作品にとつては微瑕に過ぎない。謙虚な心を有つこの作者なら更に眞實へ邁進するであらう。作者は「レアリズム」が作品の中に存在するのは、理想主義が理想の中にある時であり、われわれが現實に接觸するのは、たゞ

多くの理想性によつてである。單に補くとのみで満足する文學は、標と面とより成る憐むべき圖表にすぎない」といふブルーストの言葉を引き、「これを裏返しにしますと、レアリズムの存在しない理想性もまた標と面とより成る圖表であり、全く血がないか、でなくとも單に薄桃色の血しか持たない憐れな肉體に過ぎません」とつけ加へてゐる。「この時代の大激動はたしかにわれわれから不必要な枝葉や黄ばんだ枳葉を振り落してはくれませんが、ともすると肝腎な根まで引っこ抜かれさうな形なのです。やがて新しい枝葉を著けるためには生命の根幹は斷じてゆるがさるべきではありません。作者の「藝術のランプ」とその芯に

「臨夫人」の主要テーマは内室共婚である。作者が意識してゐるか否かは知らないが、ある意味においてこのテーマは今日の臺灣の運命を象徴してゐると謂へよう。かつてある少壯の内埔人官吏が筆者に謂つた事があった。内地人と本島人とは謂はば夫婦の撰なものだ、既に一緒になつたからにはくされ縁としてあきらめなければならぬ。多少のいざこざがあつてもお互努力して明るい生活を築いて行く。これが夫婦の

II

道である。少し骨が折れるからといつて匙を投げるのはもつての他である。ちつぽいな臺灣が手に餘る様であつたら、東亞共榮圏の建設などと思ひもよらない事だ。又本島人にしても卑屈にならないでどしどし思ふ處を開陳し、心から積極的に建設に協力しなければならぬ、と。圖らずもこの精神が「臨夫人」において繪巻物として展開されてゐる。

内室共婚が如何に理解のない周囲のものに妨げられるか、本島人青年インテリが如何なるなやみをもつか、本島人家族内における内地人若妻が如何にアト・ホームの氣持になれないか、それらの間に生れた第二世が如何にいぢげがちであるか、事實はひと通り提示されてゐる。そして作者の善意は問題に對するひとつの方向、解決を指示してゐる。女主人公安子は何も物好きに本島人の處へお嫁に行かなくてもよい人柄である。併し彼女はそれを敢行した。本島人社會に投げ込まれた彼女は幾多の不便をしのばなければならず、深い郷愁にとざされる。併し彼女は後悔する様子もなく常にそ

のまはりを善くして行かうとの温い心に満ちてゐる。夫清文とはとかくしつくりしない處があるが、いざといふ時は白刃に身をさらして夫の危急を救ふ。誠にゆかしいと共に雄々しい心情である。臺灣の詩に「在厝日々好、出外朝々難」といふのがある。父親のくににその日を送るのは誠に安易平和であるが、異つた環境、異つた社會に入る事は限りない氣苦勞と骨折に身をさらすことである。併し一歩進んで考へるなら、臺灣も日本の内である。否、日本は今臺灣よりもつと大きい、廣い處に東亞新秩序の建設にいそんでゐる。一個人の安易を捨て、國の爲に新天地の開拓に身をさしげること、これこそ日本人の天職でなければならぬ。歐洲人が植民地を開拓するのは、母國人が骨を折らなくとも安樂に暮らすことが出来るやうにする爲であり、謂はば蜜蜂を飼ふが如き仕事である。併し日本人の場合には之と事情が違ふ。

あみ白衣の勇士と白衣の天使とが相互の獻心に共鳴して終生の契りをつ結んだ。彼等の今後の生活を最も有意義に活用する事を

相談して、寮で木島人の教育に身をささげる事にし、夫は師範學校に入り妻はある病院で看護婦として働いてゐる。今迄の経験より見て川舎の木島人は教育程度低く衛生思想に乏しく、非常に氣の毒であるから夫が教員になる時は働き甲斐のある川舎にまはして貰ひたい、と彼女は往訪の人に語つた。之は暫く前のある新聞の記事である。少し不便な處にまはされると左邊を憤慨する先生に比べて何と之は卑賤しい、貴い心情であらう。個人の安易を捨て、國の爲自ら進んで困苦の渦中に身を投ずる。そして身を以て低いもの、弱いものを引上げてやる、之こそ日本精神の精髓であり、之こそ聖業を完遂せしめる原理である。而して陳夫人の血管の中にも同じ血液が流れてゐる。こゝに作者の善意が現れてゐるのである。

主人公陳清文は木島人青年インテリの一つのタイプである。彼は木島人の血を受けながら精神は多分に内地の形である。彼は氣位の高い心で周囲を見おろしながら上の方ではすぐにつかへて了ふ。結局彼は下のもの

のにきらはれ上のものに見くびられるものになつて了つた。深刻な體驗の結果初めて主人公は、徒に高い處から見下して、向上しろ、よくなれ、と號令をかけてもそれは一向周囲のものをよくする所以でなく反つて反感を買ふのみであり、周囲のものをよくして行かうとする今迄の自分の振舞は結局自己一身を有利に展開せしめようとする利己的なものにすぎなく、本當に周囲をよくして行くにはその中にとび込み、和光同塵して然る後に之を引上げなければならぬ、といふ事に氣がついた。こゝに主人公の魂の生長があり、そしてこゝに悪い意味における作者の教訓が存するのである。

#### II

昔から高砂の島は黄金の流れる處であり、米が年に二度とれ、百姓は生活の苦みといふものを知らない、と謂ひ傳へられてゐる。木島人の某家は全國の金満家の番附にもなる程で、寮と謂へば生蕃、港院と共に百萬長者の大地主が構想されるのが定石であつた。「陳夫人を讀む人は成程と更にうなづくであらう。そこで描かれてゐる

のは百萬長者の大地主であり、最高學府を出たインテリである。作中の人物にも色々深刻ななやみがあり種々の問題が起つてゐるが、それもつまるどころ金満家の息子の出世が思ふ様に行かない事や、百萬の財産を分けるにいざこざがあつたり、妻をめぐつて多少の悶着があつたりする程度のもので、汗くさい生活のほひは微塵だに感ぜられない。誠に結構な御身分の世界である。併し之を以て濼溷の妻となすなら甚しい錯誤と謂はなければならぬ。四個年間の百姓生活から抜けて来たばかりの筆者にとつて、どうしまも臆におちない處がある。筆者の生活した南部のある村落の如きは、住民の大部分は寄生虫とマラリヤで蒼白く、死亡率が相當高い。岡より衛生思想の缺如にもよるが、今少し醫療設備を利用する餘裕があれば、恐らく大半のものは助かるであらう。そこでは生きざりが爲の貞劍な努力が日々くりかへされてをり、筆舌で盡し得ない幾多の切實な問題が控へてゐる。百萬長者の榮達、煩悶など彼等には全く「他處の國の御伽話」である。そしてこのや

うな百姓が臺灣本島人の大部分を占めてゐるのである。

筆者が生蕃、毒蛇、百萬長者の大地主の三つを並べたのは決していやがらせではない。尙くもこの三者は同じ運命を辿つてゐる。事實過去の臺灣には、臺灣を知らない内地人が想像する程生蕃毒蛇が跋扈してゐず、又百萬長者の大地主もそれ程多くはゐなかつた。開化すると共に生蕃は山奥に退却せしめられ、毒蛇は退治されて了つたが、近代の生産業に従事せず、財産を均分する爲に百萬長者の大地主も現在の臺灣では過去の物語になりつゝあるのである。五百餘萬の島民の内かゝる身分のものがはたして何人あるだらうか。

百萬長者の大地主以外に、臺灣の社會は如何なる職業的階級を有してゐるか、之は更に詳細な研究に待つべき處であるが、此處であらましを素稱して見よう。先づ第一に最も顯著な花々しい存在は活動的な裕福な實業家階級である。當局との聯絡緊密にして種々の特權的な事業に従事し、甚だ有力な顔役又はボスである。かつての百萬長

者の大地主に代つて之が本島人の社會構成の最上位に位してゐる。この部類ははなやかであるがその數少く、その存在も獨自的なものでなく、見かけ程本島人社會を左右するものではない。次は中産の商工業及地主階級である。その構成員は百萬長者大地主のなれのはてから時々補充されてゐるが、併しそれ程數の多いものではない。地方の顔役又は名譽職の椅子を占め、往々にして徒黨を組んで抗争するのはこの部類で、實質的に本島人社會でも力のあるものである。構成員の最も多いのは小商工業階級及び農民である。この部類は教育、生活程度共に低く、とかく存在を認められないものであるが、併し言葉通りの縁の下の方持であり、臺灣社會の土着をなすものである。労働者階級の内農業労働は農民の副業である場合が多く、工業労働者は工業發達の程度に應じて、未だそれ程獨自的な階級を形成してゐない。尙この他にサラリーマン、自由業者、インテリ、等の中間階級は臺灣獨自の特徴を示してゐる。

右に挙げた本島人社會の諸階級の内、並

においても質においても中心であり、爾後の臺灣の動きを實質的に孕むものは何であるかと問ふなら、大地主でなく有力者でもなくして中産階級及び小商工業者農民階級を擧ぐべきである。百萬長者の大地主固より痛かるべきである。併し作者の如く本質的なものと假像、必然的なものと偶然的なものに心ある人は、歴史の前進的方向に志向して然るべきでなからうか。百萬長者の大地主は「過去の名媛としての現在」の臺灣に登場すべき人物ではない。少くとも存在理由の消失しつゝある百萬長者の大地主を以て現在の臺灣を彷彿せしめる、或ひは彷彿せしめてゐると思はれるのは、一つの過誤と謂ふべきである。

作者の眞摯な態度、建設的な精神、そして科學的な構へは我等の充分買ふ處である。思ふにある程度精神的道路の開かれてゐる裕福なインテリは内地人作家にとつて最も入り易い部面であるが、言語、傳説、慣習等種々の垣壁でとざされてゐる中産階級及び小商工業者農民と取り組む事は、更

に並々ならぬ骨折りをしなければならぬ。

この點作者の取材にも影響したであらう。作中の主人公女主人公公共に熱心なクリスチヤンであるが、作者自身もクリスチヤンではなからうかと筆者は想像する。作中の人物の煩悶苦悶は物質的生活から遊離した心のなやみであり、したがつて心の中で解決し得るものである。蓋し神の前では總ての人は平等であり、物質的生活の種々相などあへて問ふべき處でないから、魂の生長を見た主人公は、神の福音によつてなら俗悪な汗くさい生活に煩はされる事なく、心の中で容易に問題を處理し解決して行く事が出来るであらう。併しこの方向に進んで行くなら「陳夫人」はつひに「レアリズム」の存在しない理想主義」に陥る恐れがある。「理想主義を魂の中に」有つ「レアリズム」に生きているには、作者はもつと物質的な汗くさい世界に下降して來なければならぬ。

#### Ⅳ

昔ある殿様がなくなる時の事であつた。子供達を集めて一人に矢を一本渡して折らして見た處ポキッとすぐに折れて了つた。今度は矢を束にして折らして見た處中々折

れなかつた。そこで殿様は子供達に教へた、お前達もかくの如きである、誰れ々々になつてみたらずくたふされるが結束してゐたら何物にも敗けない強いものになる、と。大家族の社會的意義の一面はこの物語に盡されてゐる。治安の確保されてゐる近代國家の成立以前において自衛は一大事であつた。部落が一單位として自衛體を構成するが、大家族が自衛の中心であつた。この自衛組織があつて初めて個人が存在し得るものであり、大家族はその構成員に對して常に絶對的に優先してゐたのである。

昔の臺灣においても個人は個人として認められずは何家の人（何厝、例へば陳厝の人林厝の人といふが如し）と謂はれ、子を養ふのは父親のかほりをさせる爲であり、嫁をとるのは母親のかほりをさせる爲である、と謂はれたものである。而して大家族を統率するについて、家長は絶對權を附與されてゐたのである。かりそめにも親に不孝するものがゐれば同族の年長者は勿論のこと、部落の老人なら誰でも煙管の雁首で頭をたゞい制裁を加へる事が出来た。家族同士が私利に基いて對立したり、財産分

配で争つたり、兄弟同士或ひは親子の間で訴訟し合つたりするものは、昔の臺灣では思ひもよらぬ事であつた。併し現在では事能が異つてゐる程である。併し猶在では事能が異つてゐる程である。そしてやゝもすれば骨肉相食む事、訴訟すべきである事を本島人の屬性であるかの如く謂ふ人がゐる。この點は併し昔の大家族生活に對比してもつと／＼具體的な研究があつて然るべきである。治安の確保されてゐる帝國の治下において自衛團體としての大家族の意義は既に消失してゐる。そして資本主義經濟は、經濟活動の單位を一面において擴大すると共に他面において分解せしめてゐる。昔は父親の生活した處に生活し父祖の生業を繼ぐのが常態であつたが、現在では家族の構成員は各種の職業に従事し諸處に轉々するのが常である。資本主義經濟の發達と共に大家族が分解して小家族に轉化して行くのは世界各國向であり、現在の臺灣も大家族の分解過程にあるのである。一つの組織が起るのには避けられない處で、骨肉相食むが如き事があつても又やむを得ない事であらう。現在の臺

因に觀察される事象の内、この大家族の分解過程に由來する處が小くない。これらの事象を扱ふものに我等が希望するのは、徒に事實に覆蓋したり或ひは單に事實を指摘するに止めたりしないで、更に進んで研究考察の上歴史發展の過程を解明し以て歸趨を指摘する事である。「陳夫人」においてこの事はある程度なされてゐるが、併し我等は作者が更に一步前進する事を期待してゐる。

V

大家族に關聯して著妾の問題がよく察知社會の特徴にあげられてゐる。「陳夫人」の中でも我等は數人の妾に出會ふ。そして作者は、木島人の女の著妾に對する觀念は、個人的な感情に左右されてゐるだけで、社會的な見解からは少しも罪惡視してゐない。つまり道徳上の問題の域外にあり、著妾を制度として認めてゐる、といふ處に逆分析の等を進めてゐる。

著妾制度は元來ある社會的意義一例へば祖先の祭を行ふ子孫を絶さない爲、或ひは同族の繁榮を圖る爲を有したものであり、一夫一婦の倫理から簡單に罪惡視し得るものではない。歴史發展の過程中にこの制度

はその本來の意義を失つて、實質的には裕福な階級の過剩性慾の處理策に轉化してつた。非難されるべきは寧ろこの點にある。

著妾制度は何も察海固有のものでなく、文明國の歴史に依然存在したものである。近代的立法が身分的に著妾の制度を容認しなくなつてから形式的にこの制度は消滅したのであるが、この點から謂へば現在の臺灣でも著妾制度なるものは存在してゐない。併し社會事象の觀察に當つて我等は形よりも實質に留意すべきである。

文明社會において過剩性慾の處理策としての著妾制度が消滅したが、併しその消滅したのは單に法制の上においてのみで、實質的に著妾そのものが消滅したと思つたら大間違ひである。問題は只第二夫人第三夫人が第二號第三號に變つたにすぎない。そして法制上においても著妾制度なるものが完全に消滅したと考へるなら又間違ひである。現に我が民法は妾を認めないが庶子を認めてゐるではないか。

著妾は確かに得い封建的な弊風である。併し性道徳の見地から見れば、現代文明人は、殘念ながら舊弊の著妾制度を評價する資格がない。舊い著妾が一應妾をかくした

消滅したのではないがその代償或ひは反動として近代的な私通や實業制度がすばらしい大發展をしたのである。今年六十歳になる筆者の父の話によれば、その子供の時代に東北に遷る者と稱するものは萬華に二人しかひなかつたとの事である。處が今日では遷者と稱するものは東北だけでも百を以て數へ、これに女給その他を加へたら恐らく手を以て數へてあらう。昔一部の人にしか患まれなかつた事が文明開化の今日大衆の等しく均霑し得るものになつたのである、それだけ近代人の性道徳はルーズになつたのである。そしてこの傾向は文明の進んだ社會程顯著である。木島人が著妾を上手に偽裝しないで多小おおびらにやり、第二號第三號と呼ばずに第二夫人第三夫人と稱するのは非文明的であり時世おくれである、と若し作者が批評するならば、確かに當つてゐる。併し妾をかくした著妾を看過し、澎湃たる近代的な實業制度を放置しておきながら、ひとり所謂著妾制度を罪惡視するのは、あまりにビュリタンのな嬌風會的なイデオロギーである。

我等はもつと事實を正視しなければならぬ。